

I 学校の概要

キャリア教育モデル校事業 小豆島町立安田小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
1学級 15名	1学級 18名	1学級 15名	1学級 19名	1学級 20名	1学級 17名	3学級 14名	9学級 118名

○教員数 15名

◆学校の特徴

本校の児童は、ふれあい班活動（縦割り班）を中心として、異学年と仲良くしようとする姿がみられる。しかし、新型コロナウイルス感染症予防のため、約2年半制限が多くあり十分に活動できなかった。令和3年3学期の教育相談アンケートの、「学校が楽しいか」という問いでは、肯定的割合は84.4%であった。それに対し、「学校に行きたくないと思うことがあるか」という問いでは66.9%の児童が「よくある、たまにある」と答えている。また、「自分のことが好きか」という問いでは、「嫌い」と答える児童が9.2%おり、自分に自信がなく自己有用感の低い傾向がみられる。そして、長欠児童や遅刻をする児童もおり、基本的な生活習慣に課題のみられる児童もいる。

今年度5年生の「将来の夢や目標をもっているか」との問いでは69.6%の児童が肯定的だった。しかし、将来の夢をもてない児童、近くにモデルとなる大人がいない児童もおり、将来の展望をもちにくい児童もいる。

II 研究主題等

研究主題

社会的に自立し、自分の役割を果たしながら豊かに生きていく子をめざして

◆研究主題設定の理由

まず、特別活動を核に、教師が意図的に課題を仕掛けることで、児童が主体的に活動し自分の役割について考える機会が増えれば、主体的な学びとなり生き生きと学校生活を送ることができるだろう、次にコミュニケーションの目的や場面などを考慮して自分の考えを伝え合う態度を育てることで認め合える集団づくりができ、安心して学校生活を送ることができるだろう、さらに生活リズムについての知識・理解を深め家庭と連携し実践することで、自立の基盤としての生活リズムの定着が図れるだろうと考えた。

そして、キャリア教育で育成すべき力の「基礎的・汎用的能力」から付けたい力を「コミュニケーション力」「主体的行動」「実行力」と焦点化し、毎日学校に登校し、自分に自信をもち、将来の展望をもって生活をする子、目的をもって「〇〇を早くしたい」「自分の将来のためにこんな力をつけたい」と活動し、実感を持った達成感を味わうことのできる子を目指して本研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

1 核となる特別活動

リーダーシップとフォロアーシップを育成し、自分の役割を果たし、協力し合って活動するために、ふれあい班活動（縦割り班）・委員会活動、行事を体験の場としてPDCAサイクルで実施する。

2 基盤となる学級集団づくり

話し合い活動を重視し一人一人の児童の思いを交流することを通して、互いを認め合える温かな学級集団づくりを進めるために、対話力ゲーム、キャリア教育の日常化につなげるようにする。

3 自立するための基盤となる基本的な生活習慣の定着

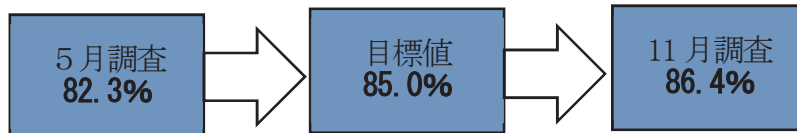
児童の知識・理解を深めるとともに、家庭と連携して実践する。生活リズムチェック、学校保健委員会を実施し、児童と保護者の意欲化につなげる。

III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取り組み

1 (児童質問紙) 苦手なことや新しいことにもチャレンジしようとしていますか。 全校生

指標 「①している+②どちらかといえばしている」の合計



指標の達成に向けた実践

1 核となる特別活動（PDCAサイクルで実施）

(1) ふれあい班活動（縦割り班活動）主体的行動・実行力

全校生を8つの班に分け、年間を通して様々な活動を設定した。集団活動に進んで参加し、多様なかわりを通して、「協力できた」「役に立つことができた」という集団の一員としての自信や誇りを持たせていくことが、自己肯定感につながると考えた。そして、活動内容を自分たちで話し合って計画し、必ず実践できる場を設定することで主体的な児童の姿を目指した。また、6年生を中心に児童自身がふれあい班を運営するようにした。

○ 安小アドベンチャー

安小アドベンチャーは、ふれあい班のメンバーと協力してアクティビティをすることでふれあい班の仲を深めるために行った。

P

6年学級活動 主体的行動

めあて
「協力」「もっと仲良く」
「わかりやすい」に合う
ゲームをきめよう。



議題
ふれあい班の仲がもっと
深まるような安小アドベ
ンチャーにしよう。

6年生は全校生を楽しませてふれあい班の仲がもっと深まるような安小アドベンチャーにしたいと学級会で話し合った。

【資料1 6年学級活動の様子】

【資料1】



ふれあい班のみんながもっと仲良くなるゲームを考えよう。

どんなルールにすると、1～5年生に分かりやすいかな。

安小アドベンチャーでは、どんなゲームをしていたかな。

これまでの安小アドベンチャーや今年度のふれあい班遊びを思い出し、3つのキーワードに合うゲームを考えた。

そして、学級活動の話合いで8つのゲームに絞って、準備を進めた。【資料2】

【 資料2 ゲーム達成カード 】

D

活動 主体的行動・実行力

当日はゲームの運営や班の下級生と一緒にゲームをして、3つのキーワードを達成しようとする姿が見られた。【資料3】



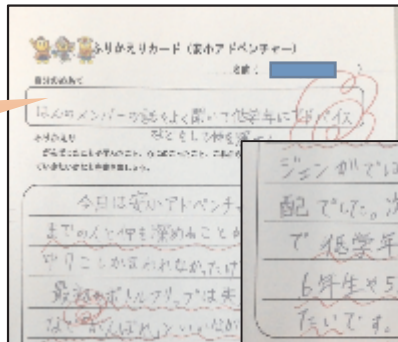
ふれあい班のみんなと最高の思い出を作りたいな。

【 資料3 児童の様子 】

C

振り返り 主体的行動・実行力

めあて



児童の振り返り

- ・ 具体的に書く。
- ・ 振り返りと見通しをつなげて書く。
- ・ 班の友達と共有する。

担当班の教師から

お家の人から

【 資料4 児童の振り返りシート 】

6年生の感想では、「協力して達成できるゲームが多かったので、前よりももっと仲が深まった。」「笑顔で楽しんでいて、やってよかった。」など、達成感であふれていた。「また、班のみんなで楽しめる活動や遊びがしたい。」と、残り少ないふれあい班遊びへの意欲も見られた。

1～5年生の感想の中には、「6年生のゲームの説明が分かりやすかった。来年は、ぼくたちもみんなを楽しませたい。」「写真係で、クリアした時や成功したときの様子を写すことができた。」など、自分の役割の振り返りや6年生をお手本にして頑張りたいという思いがたくさん見られた。

振り返りシートは、班の先生からコメントをもらい、家庭に持ち帰った。保護者からも「こんな人になりたいと思われるようにがんばろうね。」「高学年のいいところを見習って自分にいかそう。」などといったコメントをもらい児童の意欲が高められた。【資料4】

2 (児童質問紙) 係活動や委員会活動では、目的をもって計画・活動しようとしていますか。
 全校生

指標 「①している+②どちらかといえばしている」の合計



指標の達成に向けた実践

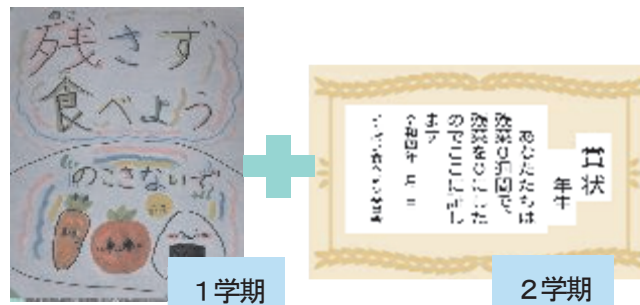
(2) 委員会活動 主体的行動・実行力

個々にどんなことを頑張りたいか自分なりの目標(目的)をもつことにより、自分はどうしたいかということが明確になり、主体的な行動につなげていった。共通の目的に向かって、準備を進めていく中で、児童は、互いにアイデアを出し合ったり、協力したりする姿が見られ、自分達も楽しみながら活動を行うことができていた。活動の後には、振り返りの場の持ち方を工夫し、次の活動に生かしていけるよう、PDCAサイクルを意識して取り組んだ。【資料5】



○ いっぱい食べよう委員会(給食)

「残菜ゼロ週間」の1学期の取り組みでは、達成できた学年が少なかったことから、2学期は、「放送回数を増やして、達成したクラスには賞状を作って渡そう。」という意見が上がり、実施した。【資料6】



【資料6 残菜ゼロ週間】

豆運び大会も行いました。計画・分担・準備・リハーサルと自分の役割を果たし、当日を迎えた。低学年の日・中学年の日・高学年の日と3回運営を繰り返し経験することで短期間でのPDCAが図れ、よりよい活動を生み出した。【資料7】



【資料7 豆運び大会】

3 (児童質問紙) 学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか。
5年生

指標 「①ある+②どちらかといえばある」の合計



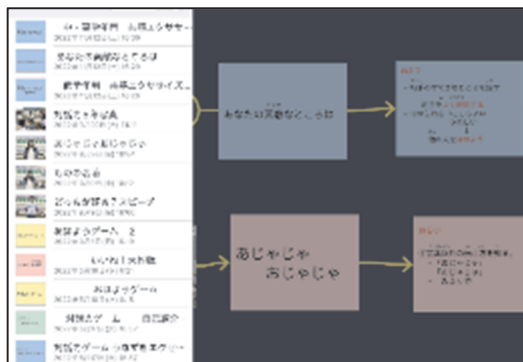
指標の達成に向けた実践

2 基盤となる学級集団づくり

自立するための基盤づくりとして、自分の考えを伝え合う態度の育成を図りながら、互いを認め合うことのできる温かな学級集団を目指していこうとキャリア教育の日常化に取り組んだ。

(1) 対話力ゲーム コミュニケーション力 (全校での取り組み)

対話力ゲームは、コミュニケーションスキルを育むためのエクササイズである。全校生が取り組みやすいよう、教師がモデルとなった動画を作成して、ねらいや具体的な対話の仕方を視覚的にとらえやすくした。【資料8】



【資料8 対話力ゲームの動画】



【資料9 朝の会でゲームをする児童】

「おはようゲーム」では、目を見ることや、笑顔・ジェスチャーを付けるなどのポイントを意識することができた。「いいね大作戦」では、ルールで決まっても「いいね」と言われることで笑みがこぼれ温かい空気が教室に広がった。自分では気づかなかったところを知ることができ自己肯定感が高まることにつながった。【資料9】

(2) キャリアの日常化

< 低学年 >

できることを増やす。自信をもたせる。困ったときに自分で伝えられる。また、どうしてほしいのか、どうしたいのか自己決定する場などを大切にすることを心がけ、教師がルールを敷かずに関わるようにした。

< 中学年 >

自分達の思いが実現していく楽しさを味わえることを大切に、係活動を〇〇株式会社として取組を行った。やりたい・やってよかった・またしたいという気持ちは、主体的行動を促し実行力にも繋がっていった。他者とかかわり自分のよさを再確認したり、自己決定の場を繰り返したりすることは、高学年のキャリア発達の素地につながっていくと感じた。

< 高学年 >

児童に任せ、自分の思いを語らせる場を大切に。学級活動での話し合いを通して、目的ややることの共有化を図ることで、一人一人の役割を確かなものにし、児童が納得して取り組んだりできるようにした。教師は、児童が主体的に行動したくなるようなきっかけ(手立て・しかけ)をコーディネートし、児童に任せる。そして振り返る場をとり、気付かせるといったPDCAサイクルをここでも大切に。した。

【資料10 学年団ごとの実践例】

4 (児童質問紙) 周りの人の意見を取り入れて、よりよい生活をしようとしていますか。
 全校生

指標 「①ある+②どちらかといえはしている」の合計



指標の達成に向けた実践

3 自立するための基盤となる基本的生活習慣の定着

生活リズムチェック表を使って学期に1回実施し、児童の意識化を図るとともに、保健便りで結果等をお知らせし保護者との連携も図った。また、メディアについてもアンケートを行い、児童の知識・理解を深めるために授業を行い自分の生活を見直すようにした。

【資料11】

生活リズムチェックの集計結果から

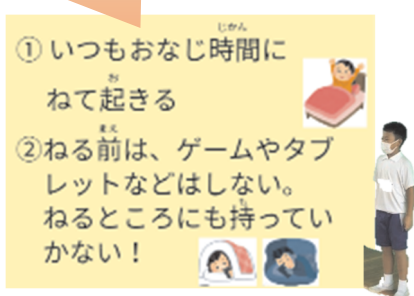
- ・朝食を食べることは、9割以上の児童が達成しており定着しているといえる。
- ・課題のある睡眠については、就寝時刻の目標設定した(低学年9時、中学年9時30分、高学年10時)を毎日守れた児童が少し増えた。早寝ができた分、早起きができた児童も若干増えた。

【振り返り】

- ・ 9時までに寝られなかったので直したい。
- ・ 休みの日でも9：30までに寝たい。
- ・ 土日の生活リズムがくずれたので、直したい。
- ・ 早起きを毎日することは意識してできたけど、早寝はあまりできなかったもので、がんばりたい。

【資料11 生活リズムチェック表】

保健委員会



よりよい睡眠リズムを築くために
 できること



PTA 母親部と
 睡眠指導講師

睡眠の効果
 睡眠不足による心身の変化

【資料12 生活リズムについて ～学校保健委員会の取り組み～】

学校保健委員会では、児童の保健委員会より、生活習慣アンケート結果をクイズ形式で伝え、よりよい睡眠リズムを築くためにできることを提案した。PTA母親部からは睡眠指導講師を招き、睡眠についてクイズや体操を交えながら、睡眠の効果や睡眠が不足した際に起こる心身の変化など講話を通して学びました。そして、生活リズム定着に向けた掲示物を委員会で作成し全校生が元気に過ごすためにできることを協力し考えていく姿が見られた。【資料12】

IV 研究成果と課題

研究の成果

○ 研究した成果の参考とする10の指標の結果

5年生に対する「将来の夢や目標をもっていますか。」という設問では、5月の69.6%から11月78.3%と自分の将来に向けて見通しがもてる児童が増えた結果となった。他の項目についても肯定的な児童が増えた。

「自分には、よいところがありますか。」「学習と自分の将来とのつながりを感じることがありますか。」の設問は変化が見られなかったが、「全くない」と全否定する児童はいなくなった。

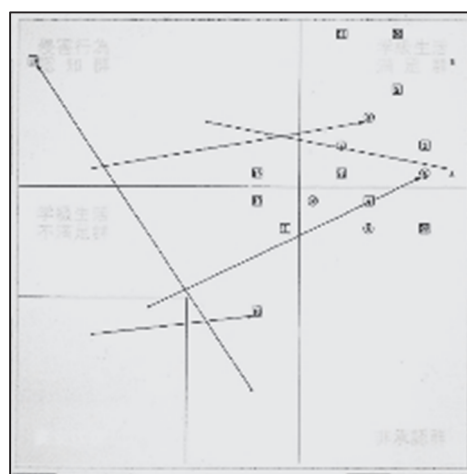
○ 楽しい学校生活を送るためのQUアンケート

(5年生の結果)

学級満足群が増えた結果「親和的なまとまりのある学級集団」となった。【資料13】



児童の主体的な活動を保障するために、学級や委員会活動での話し合い活動を重視し、その話し合いの結果は必ず実現できるようにしたこと。多様な友達の意見を尊重し、折り合いをつけながら意見をまとめ、みんなで協力して成し遂げる体験から、達成感や成就感を味わうことができたようだ。そして、その経験が新しいことへの挑戦意欲につながった。



【資料13 楽しい学校生活を送るためのQUアンケート（5年生の結果）】

以上のことから、**PDCAサイクル**で実施したこれらの活動は、**コミュニケーション力・主体的行動・実行力**を育てることにつながった。相手の存在なしには培うことのできない自己有用感は、このような異年齢集団の活動が有効である。

課題

● 教育相談アンケートの結果

学校が楽しい児童は85%、自分のことが好きという児童も72%と肯定的な児童がわずかに増加。学校へ行きたくないと思う・時々ある児童は、59%に減少し、4月当初よりは遅刻や欠席の児童が減った。しかし、長欠の児童もおり、ケース会を開いて家庭と一緒に改善策を相談している所である。

また、自分のことが嫌いという児童もいるので、一人一人のよさや存在を認める言葉がけ、活躍の場をこれからも設定していきたい。